

好酸球増多を伴う血腫を呈した黒毛和種子牛の症例報告（第2報）

丹後家畜保健衛生所

○坂田貴洋 田中義信

【はじめに】好酸球増多を伴う多発性血腫を呈した黒毛和種子牛の事例について既に報告。今回、血腫の症状を呈する類症事例に遭遇し、前症例と比較。【経過】広範囲に打撲を負い抗生剤を投与した9か月齢雄子牛の全身が腫脹（7病日）。その後、ステロイド系抗炎症剤を併用したが、右下腿部の腫脹及び重度跛行継続のため44病日に病理解剖を実施（前症例では抗生剤のみ投与）。なお、抗炎症剤併用後に抗生剤注射部の腫脹無し（前症例では腫脹）。血液検査所見はHt31～40%（前症例では16.7%まで減少）、好酸球比5.38%（前症例では15.5%まで著増）、空胞を含む好酸球比は5.38%（前症例では空胞及び濃染顆粒を含む10.8%）。病理解剖所見は打撲部に血腫（前症例でも同じ）、注射部に水腫（前症例では血腫）、皮下は正常（前症例では皮下出血）。病理組織学的所見は血腫部に肥満細胞の浸潤は無かったが（前症例では浸潤）、周囲部に好酸球浸潤（前症例でも同じ）。また注射部位隣接のリンパ節にのみ好酸球浸潤（前症例では他のリンパ節にも浸潤）。【考察】本症例では前症例同様、打撲治療に用いた抗生剤に過敏に反応し、局所で好酸球が活性化したが、抗炎症剤により薬剤過敏反応が抑制され肥満細胞及び血小板の活性化が抑制されたと推察。今後は、薬剤過敏歴のある農場把握と類症事例での血液塗抹検査を実施し、抗生剤の慎重使用に加え抗炎症剤の併用も診療方針の一つとしたい。